『ティードレクス・サガ』における グリームヒルトの復讐

野内清香・石川栄作

Grimhilds Rache in der Thidrekssaga

Sayaka NOUCHI und Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Die Nibelungensagen, die aus Rheinfranken im 5. und 6. Jahrhundert stammen, sind im Norden reichlich überliefert. Man teilt die nordischen Überlieferungen zeitlich in zwei Gruppen: Die erste Überlieferung seit Anfang des 9. Jahrhunderts durch die Wikinger und die zweite seit Ende des 12. Jahrhunderts durch niedersächsische Hanseaten. Das Hauptwerk der älteren ist die Völsungasaga und das der jüngeren die Thidrekssaga. In der letzten Arbeit haben wir die Geschichte von Sigurd in der Thidrekssaga behandelt und sind zum Schluss gekommen, dass die Schilderung in der Thidrekssaga nicht aus der älteren nordischen Völsungasaga, sondern aus der jüngeren niederdeutschen Überlieferung stammt. Das heißt, die Thidrekssaga steht dem Nibelungenlied viel näher. Das zeigt die Geschichte von Grimhilds Rache in der Thidrekssaga noch deutlicher.

In der vorliegenden Arbeit behandeln wir also Grimhilds Rache in der Thidrekssaga. Wir werden zuerst den Teil über Grimhilds Rache ins Japanische übersetzen und dann die Charakteristik von Grimhilds Rache im Vergleich mit der Völsungasaga und dem Nibelungenlied klarmachen.

Aus der hier übersetzten Geschichte ergibt sich – wie erwartet – deutlich, dass Grimhilds Rache in der Thidrekssaga ganz anders ist als der in der Völsungasaga, und dass die Thidrekssaga näher dem Nibelungenlied steht.

Grimhild vermählt sich wieder mit König Attila, aber nicht indem ihre Mutter sie dazu zwingt, sondern indem sie, wie im Nibelungenlied, den Boten des Hunnenkönigs um Werbung empfängt. Zu der Einladung der Niflungen ins Hunnenland veranlasst Grimhild in der Thidrekssaga ihren Mann Attila, auf Sigurds Gold anspielend. Als die Niflungen im Hunnenland ankommen, fordert also nicht Attila, sondern Grimhild von ihnen das Gold, wie im Nibelungenlied.

Dass sich die Thidrekssaga dem Nibelungenlied nähert, zeigen auch die Episoden wie die auf einen bösen Traum beruhende Warnung der Königin Oda vor der Abreise der Niflungen, die unglückverheißende Weissagung der Meerfrauen in der Donau, der Aufenthalt der Niflungen bei dem Markgrafen Rodingeir in Bakalar, Thidreks Warnung vor Grimhilds Ränken und das besondere Interesse für Högni im Hunnenland. Beim Fest im Baumgarten schlägt Aldrian, der Sohn von Attila und Grimhild, zwar Högni mit der Faust auf die Wange, im Unterschied zum Nibelungenlied, aber der Tod des Sohnes verursacht den Kampf zwischen den Niflungen und den Hunnen, wie im Nibelungenlied.

Daraus ersieht man, dass die Thidrekssaga die jüngere dem Nibelungenlied näher liegende Überlieferung enthält. Man kann also vermuten, dass die Dichter der beiden Werke wahrscheinlich die gleiche Überlieferung der Nibelungensage benutzten. Es gibt aber viele Unterschiede. Beim Kampf unterscheidet sich die Paarung der Kämpfer in der Thidrekssaga von der im Nibelungenlied. Dieser Unterschied kommt daraus her, dass der Nibelungendichter die Szene des Kampfes im Hunnenland erweiterte, indem er neue Personen in seinem Heldenepos auftreten ließ.

Der bemerkenswerteste Unterschied besteht aber in den Behandelungen der Personen Gunnar, Högni und Grimhild. Der König Gunnar (Gunther), der bis zur letzten Szene fortlebt, wird in der Thidrekssaga am Anfang des Kampfes von Herzog Osid gefangen und in einen Schlangenhof geworfen, wo

er sein Leben verliert. In diesem Punkt beeinflusst die Völsungasaga wahrscheinlich die Thidrekssaga. Högni (Hagene) wird sowohl in der Thidrekssaga als auch im Nibelungenlied von Thidrek (Dietrich) am Ende des Kampfes gefangen und zu Grimhild gebracht, aber sein Tod in der Thidrekssaga ist ganz anders geschildert als im Nibelungenlied, wo er von Kriemhild (Grimhild) getötet wird. Thidrek lässt nämlich den schwer verwundeten Högni heim in seine Herberge bringen und seine Verwandte namens Herrad Högnis Wunde verbinden. Thidrek gibt ihm auf seinen Wunsch eine Frau, die mit ihm schläft. Die Frau empfängt einen Sohn von ihm. Das sagt Högni zu ihr und stirbt danach. Grimhild tötet in der Thidrekssaga also nicht Högni, tritt aber zu ihren Brüdern Gernoz und Giselher und stoßt ihnen das lohende Scheit in die Münden, um festzustellen, ob sie tot sind oder noch leben. Gernoz war schon tot, aber Giselher stirbt daran. Wegen ihrer Grausamkeit wird sie von Thidrek getötet, nicht von Hildibrant (Hildebrand) wie im Nibelungenlied.

So bleiben Attila, Thidrek und Hildibrant unter den Hauptpersonen am Leben. In diesem Punkt auch sind die Thidrekssaga und das Nibelungenlied gleich. Die beiden stehen näher aneinander. Wie der Redakteur dieses Werks am Ende die Quellen des Burgundenuntergangs erklärt, kamen vielleicht die Hanseaten aus Soest, Bremen und Münster nach Norden und erzählten die niederdeutschen Sagen und Geschichten. Die nordischen Dichter, die sie gehört hatten, notierten die Geschichte von dem Burgundenuntergang. So entstand später in der Mitte des 13. Jahrhunderts die Thidrekssaga. Im Gegensatz zu der älteren nordischen Völsungasaga zeigt die Thidrekssaga die jüngere dem Nibelungenlied näher liegende Überlieferung. Gerade darin besteht die Charakteristik dieses Werks. Diese Thidrekssaga ist außerdem sehr wertvoll und bedeutsam zum Verständnis des Wandels der Nibelungensage.

序

ニーベルンゲン伝説は五、六世紀のゲルマン民族移動時代にライン河畔フランケンの領土で生まれた[1]のち、九世紀以降には北欧のノルウェーやアイスランドへも伝承されて、エッダやサガのかたちで現代にまで伝えられていることは周知のとおりである。

この北欧への伝承は時代によって大きく第一次伝承と第二次伝承の二つに分けられる。第一次伝承はヴァイキング等によって九世紀初め以降に北欧へ伝承されたもので、それらをのちに文字で書き留めたものが『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』である。[2]第二次伝承は、その後ドイツで新たな展開を見た歌謡や説話が十二世紀後半以降にハンザ商人たちを介してノルウェーへと伝えられたもので、その代表が『ティードレクス・サガ』である。[3]

我々はこの二つの北欧伝承の中でも第二次伝承の『ティードレクス・サガ』におけるニフルンゲン伝説の部分に関して共同研究を進め、前稿ではその前半部分の「若き英雄ジグルトの物語」を取り扱った。[4]そこで得られた成果は、第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』が古い伝説相を伝えていて北欧神話化されていたのに対して、第二次伝承の『ティードレクス・サガ』は比較的新しい伝説相を伝えていて、低地ドイツ的性格を如実に示しているということであった。ジグムントの息子ジグルトもここではもはや北欧の主神オーディンに結びつけられることもなく、またジグルトがのちに出会うことになるブリュンヒルトも、ここではもはやヴァルキューレではない。ブリュンヒルトがここに登場しているのは、グリームヒルトとの口論を展開し、ジグルトの暗殺のきっかけを作るためであり、『ティードレクス・サガ』の編者はブリュンヒルトにはそれほど大きな関心を示してはいない。このブリュンヒルトに代わってこの作品に

---

1) Vgl.Andreas Heusler: Nibelungensage und Nibelungenlied. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1973. (Stammbaum des Nibelungenlieds) S. 49. このホイスラーのいわゆる「発展段階説」については石川栄作：『ニーベルンゲンの歌』を読む　講談社学術文庫 2001 年 24-57 頁を参照されたい。

2) 石川栄作：ジークフリート伝説　ワーグナー『指環』の源流　講談社学術文庫 2004 年 43-63 頁を参照されたい。

3) 石川栄作：同上書 64-79 頁参照。

4) 石川栄作・野内清香：『ティードレクス・サガ』における英雄ジグルトの物語　徳島大学総合科学部「言語文化研究」第 12 巻 2005 年。

おいて多大の関心を集めているのがグリームヒルトである。このグリームヒルトが重要な役割を果たしているのは、その後ドイツで新たな展開を見せた比較的新しい伝承によるものであり、『ティードレクス・サガ』はすべてにおいてドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』により近い内容を示している。このことはそのあとで展開されるグリームヒルトの復讐になるとさらに一層明白に理解されるのである。

そこで本稿では、その後半部分の「グリームヒルトの復讐」を取り上げて、最初にその部分を邦訳によって紹介したあと、『ヴォルスンガ・サガ』や『ニーベルンゲンの歌』との比較において『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐の特質を探り出すことにしたい。テクストには最近では入手しがたいフィーネ・エリヒセンの現代ドイツ語訳[5]を底本に用いるが、訳出するにあたっては、原典の北欧語からの貴重な翻訳である山崎陽子氏の日本語訳[6]を常に参照させていただき、脚注についてもそれを大いに活用させていただきたいと思う。

なお、登場人物や地名等のカタカナ表記については、前稿と同様、フィーネ・エリヒセンの現代ドイツ語訳に基づいて、ドイツ語読みに従っていることを付記しておく。

Ⅰ.『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐

1. アッティラ、オージトをニフルンゲン国に派遣する

ズザート[7]のアッティラ王は、若きジグルトが死んだこと、そしてその妻グリームヒルトはまだ生きていて、きわめて美しくたいへん賢い女性であるということを耳にした。彼自身も今は寡夫だった。彼は甥オージトに使いの者をやって、自分のところに来てくれるように言った。大公は、伯父が自分を呼んでいることを聞き知るや否や、二十人の騎士とともにズザートへと出発した。アッティラ王は彼を喜んで出迎え、自分が使いを送ったのは、自分に代わって彼

---

5) Fine Erichsen: Die Geschichte Thidreks von Bern. (Thule 22.Band) Eugen Diederichs Jena 1924.

6) 山崎陽子：翻訳『シズレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説Ⅲ, Ⅳ　目白大学人文学部紀要「言語文化篇」第 7-8 号 2001-2 年。

7) 北ドイツのハンザ都市ゾーストにあたるが、以下の物語ではドナウ河方面のフン国にあるとされている。

にニフルンゲン国への使者になってほしいと願っているからだと言った。つまり、自分の代理として、グンナル王の妹であり、かつて若きジグルトが妻としていたグリームヒルトに求婚するために彼を派遣したいというのである。オージト大公は、国王が自分を送ろうと思われている所ならどこへでも行くつもりだと言った。彼は多くの費用をかけて旅支度を調え、四十人のきわめて宮廷的な騎士たちと豪華に身なりを調えた大勢の小姓たちを連れて行った。彼らは旅路を進み、ニフルンゲン国までやって来て、ヴェルニツァ[8]でグンナル王に対面した。彼らは手厚いもてなしを受け、数日間そこに滞在した。

2. グリームヒルト、求婚を受け入れる

ある日、オージトはグンナル王並びにヘグニとゲールノーツに話し合いのために来てもらった。彼らが皆集まると、大公オージトは言った。「ズザートのアッティラ王がグンナル王と弟君ヘグニによろしくと申し上げております。我が王はあなた方の妹君グリームヒルトを妃にしたいと望み、あなた方にふさわしいたくさんの持参金を持たせてくれることを望んでいます。彼はまたあなた方の友になりたいと望んでいます。私はここから立ち去る前に、私の依頼がどのような結果になるのかお聞きしなければなりません。」グンナル王は答えた。「アッティラ王は強力な男であり、偉大な王侯だ。我が弟たち、ヘグニとゲールノーツが私に賛同してくれるなら、我々は彼にこの結婚話を断ることはできないだろう。」ヘグニが答えた。「権勢あるアッティラ王が我らの妹を娶ることは、我々にとって大きな名誉であるように私には思われます。彼はたいへん力ある偉大な王であり、この結婚によって、我々は今まで以上に堂々とした主君となることができましょう。しかし、このことについてはグリームヒルトと話し合わねばなりますまい。というのは、彼女はたいそう高慢な気質でして、アッティラ王だろうが、世界中のどんな男だろうが、彼女の同意なしには迎え入れないのです。」ゲールノーツはヘグニとグンナルの好きなようにさせた。彼らにそれがよいと思われるなら、彼はそれに異存がなかった。そこでグンナル王はオージトを連れてグリームヒルトのところに行き、彼女に話の全容を話して聞かせ、彼女が心の中でこの結婚についてどう思っているのかと尋ねた。彼女が答えて言うには、アッティラ王を夫として拒みはしません、彼はまことに権勢豊

---

8) ライン河畔のヴォルムスにあたる。

かな王であるし、このような使者を送ってきたからには、グンナル王が了承するなら、自分もむしろ喜んで同意したいということであった。国王も彼女に異存がない以上、結婚を拒まないと言った。グンナル王とその弟は、さらにその旨をすべて大公オージトに伝えると、その結婚話はすっかりとまとまった。それから大公オージトは帰国の途についた。彼が出発しようという時、グンナル王は金で飾られた盾と、かつて若きジグルトの所有物であった兜、素晴らしい武器を取り出して来て、それらをオージトに贈った。彼らは良き友としてお互いに別れた。大公はフン族の国に帰国し、アッティラ王に旅の全容を話して聞かせた。国王は彼に感謝して、彼の旅がまことに上首尾に進んでうれしいと言った。

3. アッティラ、花嫁を迎え入れる

それから間もなく、アッティラ王はニフルンゲン国に彼の花嫁グリームヒルトを迎えに行くために旅支度をした。この旅は豪華に準備された。国王は五百人の騎士と大勢の小姓を連れて行った。グンナル王はアッティラ王とティードレク王が自分の国にやって来たと聞くとすぐに、彼の最高の家臣たちを連れて馬に乗って彼らを出迎えに行った。彼らがお互いに出会うと、グンナル王はアッティラ王の前に進み出て、彼に挨拶し、その弟ヘグニはティードレク王の前に進み出た。彼らは口づけを交わし、お互いに親友同士のように挨拶した。それから彼らは皆一緒にヴェルニツァの町へと馬を進めた。たいへん贅沢な宴が今や催され、この宴の席でグンナル王はアッティラ王に自分の妹グリームヒルトを嫁がせた。宴が終わると、アッティラ王とティードレク王は帰国した。別れの際にグンナルはティードレクに、若きジグルトの愛馬であったグラニを贈った。若きジグルトの剣グラムは辺境伯ロディンゲイルに与えた。さらにアッティラ王にはグリームヒルトとともに彼に見合うだけのたくさんの銀を与え、こうして彼らは良き友として別れた。アッティラ王とティードレク王は彼らの王国に帰り、国を守った。しかし、彼の妃グリームヒルトは毎日彼女の愛しい前夫である若きジグルトを思って涙を流した。

4. グリームヒルトとアッティラの夜の会話

グリームヒルトがフン族の国にやって来て七冬が過ぎたある晩のこと、彼女はアッティラに話しかけた。「アッティラ王よ、たいへん悲しいことに、私はこ

の七冬の間、兄弟たちに会ったことがありません。王よ、あなたはいつ彼らを招待してくれますか？　あなたにお話ししようと思いますが、このことをあなたはもしかするとすでにご存じかもしれません。私の前夫である若きジグルトはとてもたくさんの黄金を所有しており、世界に彼ほど豊かな王がいないほどでした。そしてこの莫大な財宝は今や私の兄弟たちが持っていて、彼らはそのうちの一ペニヒも私に与えようとしないのです。王よ、この財宝は私が管理するのが妥当だと私は思うのです。まことにあなたに知ってもらいたいのですが、私がこの財宝を受け取ったなら、あなたはそれを私とともに所有することになるのです。」アッティラはこの言葉を聞いて、彼女が言ったことを本気になって考えてみると、本当にそのとおりだと悟った。しかし、彼はすべての人間の中でも最も黄金欲の強い男であり、自分がニフルンゲンの財宝を所有していなければ、気の済まない男だった。そのため彼は答えた。「妻よ、若きジグルトがたくさんの黄金を所有していたことは、私も知っているぞ。まず最初は彼が打ち殺した大きな竜から奪い取ったもの、次には彼が戦利品として獲得したもの、第三は彼の父ジグムントがかつて所有していたものだ。これらすべてが我らの手にないことは我らには悔しいことだ。しかし、グンナル王は我々のたいへん愛すべき友だ。そこで私は、そなたが彼らに会いたいのであれば、兄弟たちをここに招待したいと思う。私は出費を惜しまずに、このうえなく素晴らしい宴の準備をしよう。」こう言って彼らは今回のところは話し合いを終えた。

それから間もなく、グリームヒルトは二人の男を呼び寄せて、彼らに彼女の用件を告げたが、それは彼女が彼らをニフルンゲン国に彼女の知らせを携えて派遣するつもりだということだった。「この旅のために、私はあなたたちに、金や銀や豪華な衣装そして名馬を調えてやりましょう。」この旅芸人たちは、王妃様が要求なさることは何でも喜んでいたしましょうと言った。そこでグリームヒルトは彼らをできるだけ豪華に着飾らせ、アッティラ王と自分の封印のついた手紙を彼らに持たせてやった。

5. ニフルンゲン族、ズザートに招待される

使者たちは旅路を進み、ニフルンゲン国までやって来て、グンナル王にヴェルニツァの町で対面した。彼は義弟であるアッティラ王の使者を快く迎え入れ、彼らにたいそう手厚いもてなしを示した。彼らはしばらくの間そこに滞在した後、知らせを伝えるようにと言われていた一人が立ち上がり、グンナル王の前

に歩み出て、言った。「ズザートのアッティラ王とグリームヒルト王妃がヴェルニツァのグンナル王、弟君ヘグニ、ゲールノーツそしてギーゼルヘル、並びにすべての友にご挨拶と神の祝福とを送られています。我々はあなた方を宴と友好のために我々の国にお招きいたします。アッティラは今やひどく高齢で、身体も衰え、彼の国を治められなくなりました。彼の幼い息子アルドリアーンは、ようやく数回の冬を数えたばかりの年です。彼が自ら国を治められるだけの年齢に達しない間は、あなた方が甥とともに、その母親の兄弟として国を治めるのが何よりも相応しいと我々には思われるのです。我々の願いに従って、国土を我々とともに管理して下さい、・・・、そしてあなた方の名誉に見合う大勢の家臣たちをお連れ下さい。よろしくお願いいたします！」

6. グンナル、招待を受け入れる

グンナルはこの手紙を読み終えると、彼の弟たちであるヘグニ、ゲールノーツそしてギーゼルヘルを相談のために呼んだ。彼はこの件について述べ、どうすべきか、彼らの助言を強く求めた。ヘグニは答えた。「ひょっとしたらあなたはフン族の国へ、あなたの義弟アッティラ王の招待に応じて出かけたいとお思いですか？　しかし、もしあなたがそうしたなら、あなたは帰って来ることはなく、あなたの同行者も誰一人として帰ることはないでしょう。というのは、グリームヒルトは不実で抜け目ない女です。彼女は我らに罠を仕掛けるかもしれません。」グンナル王は答えた。「我が義弟アッティラ王が私に友好的に知らせを送ってくれたのだから、私はフン族の国に行きたいと思う。それにこの者たちは本当のことを言っている。ヘグニよ、お前は出かけるべきではないと助言するのだな。お前が私に与える忠告は、お前の父が私の母に与える忠告のように、他のものよりもますます悪いものだ。私はお前の言うことには従わないで、必ずやフン族の国へ出かけてやろう。私は自分の望みどおりに戻って来ることだろうと思う。私がフン族の国を立ち去る前には、その国はすっかり我が権力の中にあることだろう。もしお前にそうする気があるなら、ヘグニよ、私について来い！　さもなくば家に残っておれ、思い切って旅立つ気がないのならな！」ヘグニは言った。「私はあなた以上に自分の命が奪われるのを恐れて、そう言うではありません。私はあなたよりも戦いを恐れたりはしません。しかし、私はあなたにはっきりと申し上げましょう。もしあなたがフン族の国に出かければ、連れて行く人数が少なかろうが多かろうが、誰も生きてニフルンゲ

ン国に戻れはしないでしょう。それにも拘わらずあなたが出向くつもりなら、私は国に残ります。あなたは思い出さないのですか、グンナル王よ、どのように我々が若きジグルトと決別したのかを？　あなたがそれを思い出さないとしても、私はそれを思い出す者がフン族にいるのを知っています。それは我らの妹グリームヒルトです。あなたがズザートに行ったならば、彼女はきっとあなたにそれを思い出させるでしょう。」グンナル王は答えた。「お前が妹のグリームヒルトに対してそのような心配を持っているために、あえて出かけようとしないとしても、それでも私は行くぞ。」ヘグニはしばしば自分の母のことを非難されることに怒りを覚えて、立ち上がり、広間に行って盟友フォルケールに近づき、彼に話しかけた。「お前は一緒にフン族の国へ出かける気があるだろうな。グンナル王はグリームヒルトの招待に応じる決断をしたのだ。我らの家来もすべて我らとともに出かけてもらうことにして、大至急武装してもらおう。だが、一緒に来るのは、あえて戦う気がある者だけでよい。」

7. オダの警告

その時、王妃オダ、グンナル王とギーゼルヘルの母が立ち上がり、国王に歩み寄って言った。「殿、私は夢を見ました。その夢をお聞き下さい。この夢の中で私はフン国でたくさんの鳥が死ぬのを見ましたが、そのために私たちの国の全土から鳥がいなくなってしまうほどでした。今お聞きすれば、あなた方ニフルンゲン族はフン国に出かけるつもりだとか。しかし私は、この旅からはニフルンゲン族にとっても、フン族にとっても大きな災いが起こることを知っています。一番起こりそうだと私に思われるのは、もしあなた方が旅立てば、かなりの人たちがそのために命を失うだろうということです。お願いですから、殿、行かないで下さいまし。この旅からはただ悪いことばかりがあなた方の身に起こるでしょう。」そこでヘグニが答えた。「グンナル王はすでに旅を決断されたのだ。変更することはない。そなたたち年取った女たちの夢など我々は気にはしない。そなたたちはろくなことを知らない！　そんな下らない話では我々の旅を妨げることはできない。」王妃は答えた。「グンナル王もあなたも、ヘグニよ、フン族の国へ行くか行かないかは、あなた方で決めたらよろしいでしょう。けれど、私の若い息子ギーゼルヘルにはこの国に留まってもらいます。」「いや行きます」とギーゼルヘルは言った、「兄上たちが出かけて行くなら、私も本当にここに残ろうとは思いません」、そして勢いよく立ち上がり、自分の武器を手

に取った。

8. フン国への出発

グンナル王は今や知らせを全領土に送り、強く大胆で、王に忠実に愛情を抱いているすべての家来たちの中で、最も勇敢で最も大胆で最も恐れを知らぬ者たちは、彼のもとに来るようにと伝えた。この旅支度がすっかり調った時、グンナル王のもとには千人の家来たちが集まった。すなわち、輝く鎧、きらめく兜、切れ味のよい剣、鋭い槍、真新しい盾、そして敏捷な馬で豪華に装備を調えた立派な家来たちである。幾人もの美しく素晴らしい女性たちは、夫あるいは息子や兄弟たちと別れて、その国に留まった。

ヘグニはグンナル王の幟(のぼり)を手に取った。その一番外側の縞は金色で、真ん中のものは白色で――そこには赤い絹糸で冠を戴いた鷲が刺繍してあった――下は緑色だった。そのような鷲をグンナルは彼の装備品すべてにつけており、ヘグニも同じものをつけていたが、ただ彼の場合は鷲が戴冠していなかった。ゲールノーツとギーゼルヘルは赤い盾を持っており、そこには金のオオタカがはめ込まれていて、このしるしを彼らは彼らの武装すべてにつけており、彼らの幟はそれと同じ色だった。それによって、彼らがどこに馬を進めていても、彼らだと見分けることができた。ニフルンゲン族は今や彼らの旅路を進んで、ライン河畔までやって来たが、そこではライン河とドナウ河が合流していた。[9]流れが一つに交わるところでは、たいへん川幅が広かった。しかし、彼らは船を見つけられず、その夜はそこでテントを張って過ごした。

9. ヘグニの夜間の体験

その晩、夕食の後でグンナル王は弟ヘグニに言った。「我々の家来たちのうち誰が今夜の見張りをするのがよいだろう？　お前がよいと思う者を決めてくれ。」ヘグニは答えた。「上流への見張りについては、あなたがお望みの者を決めるといいでしょう。下流へは私が自分で歩哨を務めましょう。そうすれば、何らかの船を見つけられるかどうかも分かりましょう。」それをグンナル王は了

---

[9] このあとに続く「流れが一つに交わるところでは、たいへん川幅が広かった」という記述のために、編者の想像の中でライン河とドナウ河を合流させたのであろうか。ともかくも、この渡河の場面では広い河が考えられている。

承した。他の者たちが横になって眠っている間に、ヘグニは完全に武装して下流へと歩いて行った。月が明るく輝いていたので、彼は道をはっきりと見分けることができた。ヘグニは今や池の畔――それはメーレといった――にやって来て、いくつかの人影を水の中に認めた。その者たちの衣服が岸に置かれているのを彼は目にした。彼は衣服を取り上げ、それらを隠した。人間のような姿をした者たちは、まさに人が水の精と呼んでいるものに他ならなかった。彼女たちは海や水場に住んでいるものである。この水の精たちはライン河からこの池に遊びに来ていたのだった。その時、水の精たちのうちの一人がヘグニに呼びかけ、彼女たちに衣服を返してくれるようにと頼み、水の中から浮かび上がってきた。ヘグニは答えた。「まずはわしに教えてくれ、我々がこの河を渡って行き、また戻って来ることができるかどうか。わしが質問したことに答えなければ、お前は決して服を取り戻せないぞ。」水の精は言った。「あなた方は皆無事にこの河を越えて行くことができるでしょう。しかし、決して戻って来ることはできません。そしてあなたにはさらに多くの困難が前に待ち構えていることでしょう。」そこでヘグニは剣を振り上げて、その水の精と、その娘を二人とも真っ二つに斬り捨てた。

10. ヘグニ、渡し守を見つける

それから彼はさらに少しばかり下流へ歩いて行った。そこで彼は河の中央に船を、そしてその中に一人の男がいるのを見た。その男に彼は、陸まで漕いで来てエルズングの家来を運んでくれと頼んだ。彼がここでそのように声をかけたのは、彼らが若きエルズング伯の国にやって来ていたからであり、渡し守はそうした方がより進んで自分のところに漕ぎ寄せて来るだろうと思ったのである。渡し守は答えた。「俺はエルズングの家来だからって他の奴より喜んで運ぶ気はないね。報酬無しには俺はそもそも漕がないんだよ。」そこでヘグニは黄金の指輪を手に取って、それを高く掲げて言った。「これを見ろ、あっぱれな奴よ、お前への渡し賃だ。ここに黄金の指輪がある。それをお前に渡し賃として贈ろう、もしお前がわしを船で渡してくれたらな。」渡し守は今や、自分に黄金の指輪が渡し賃として差し出されたことを知ると、彼は少し前に結婚して美しい妻を迎え、その女をたいへん愛していることを思い浮かべた。手に入れられるなら、彼は彼女に黄金の装飾品を手に入れてやりたいと思っていた。そのため彼は櫂を船に取り付け、陸まで漕ぎ寄せた。今やヘグニは船に乗り込み、渡し守

に金の指輪を与えた。渡し守は河を渡って元の岸に漕いで戻ろうとしたが、ヘグニは彼に上流へと向かって漕がせた。彼はそれを欲しなかった。ヘグニは、意志がどうであれ、渡し守に漕がねばならないと言った。すると船頭は恐れをなして、ヘグニが望むように漕いで行くと、ニフルンゲン族の一団のいるところに辿り着いた。

11. ニフルンゲン族の渡河

グンナル王とその軍勢は全員まだ起きていて、すでにごく小さな舟を調達していた。この小舟ですでに何人かが河岸から出発していた。しかし、彼らが陸から離れるや否や、小舟の中全体が水でいっぱいになり転覆したため、彼らは苦労して陸に辿り着いた。ヘグニが今や大きな船で彼らのところに戻って来ると、彼らはたいへん喜んだ。グンナル王は自ら、多くの騎士たちとともに船に乗り込んだ。彼らは漕いで河の中央までやって来た。ヘグニはたいへん力強く漕いだので、彼は一漕ぎでどちらの櫂も粉々に打ち砕き、止め杭を壊してしまった。そこで彼は「畜生、わしらにこの櫂の止め杭を作った奴め」と叫び、飛び上がって、さっと剣を抜いて、彼の前で椅子に座っていた渡し守の頭を斬り落とした。グンナル王はヘグニに言った。「なぜお前はこんな非道なことをするのだ？　お前は彼に何という罪を着せるのだ？」ヘグニは答えた。「私は我々のフン族の国への旅に関する知らせが先に着くことを望みません。これでやっと奴はそれについて何も語れまい。」そこでグンナル王は怒って叫んだ。「お前は、いつもと同じように今も、悪いことしかできないのだな。お前が上機嫌なのは、悪さを働く時だけだ。」ヘグニは答えた。「なぜ私が我々の旅で悪事をなすことを惜しむ必要があるのですか？　私は詳しく知っていますが、我々のうち誰一人故郷に帰ることはできないのです。」グンナル王は舵を取った。その時舵を繋ぐベルトが壊れ、舵が外れて、船は風と波まかせになった。すばやくヘグニが舵に駆け寄り、舵のベルトを力ずくで引き寄せた。彼がそれを修理して、舵を再び固定した時には、岸からそう遠くなかった。その瞬間、船は転覆した。船の中に座っていた人々は、すっかり衣服を濡らして陸に着いた。彼らは今や船を陸に引っ張って、壊れたものを修復し、部下たちに命じて軍勢のところに漕いで戻らせ、すべての者がこちらの岸に上がるまで長い時間かけて渡らせた。それから彼らは一日中旅路を進んで行った。

12. ヘグニとエッケヴァルト

その晩、彼らは横になって、ヘグニに歩哨を任せた。皆が眠ってしまうと、ヘグニは独りで軍勢から遠く離れて偵察に出かけて行った。そこで彼は一人の男が横になって眠っているのを見つけたが、その男は武装して、剣を自分の身体の下に柄頭が覗いて見えるように置いていた。ヘグニはその剣を抜き取り、遠くに投げやった。そこで彼は右足でその男の脇腹を蹴って、彼を目覚めさせた。男は飛び起き、自分の剣を手探りで探したが、それを見つけられずに言った。「何てことだ、眠ってしまった！　自分の剣が見つからない。我が主君は、私が眠っている間に、国の守りがおろそかにされたとお考えになるだろう。」そこで彼は、軍勢がやって来ているのに気づいて、続けて言った。「呪われよ、この眠りよ！　今や軍勢が我が主君、辺境伯ロディンゲイルの領土にやって来た。三日三晩私は起きていて、そのために眠り込んでしまったのだ。」ヘグニは彼に話しかけた。なぜなら、彼はその男が実直な奴だと思ったからである。「お前は確かに善良な奴だ。見よ、ここにわしの黄金の指輪がある。お前は立派であるので、わしはそれをお前に与えよう。お前にはそれでもって、それを最初に贈った奴よりも利益を得てもらいたいものだ。わしはお前に剣も返すとしよう。」彼もまたそのようにした。男は答えた。「神があなたにくれぐれも贈り物の返礼をして下さいますように。まずは私に剣を返してくれたことに対して、そしてそれからあなたの黄金の指輪に対して。」ヘグニは言った。「お前はこの軍勢のことでは何も心配する必要はないのだ。お前が辺境伯ロディンゲイルの国を守っているのならばな。彼は我々の友だ。この軍勢を率いているのは、ニフルンゲン国のグンナル王とその兄弟たちだ。さあ、わしに言ってくれ、実直な勇士よ、どこでお前は我々に夜の宿泊場所を割り当ててくれるのか、そしてお前の名は？」「私の名はエッケヴァルトです」と男は言った。「あなたがこちらにおいでだとは、私は驚いています。あなたはアルドリアーンの息子のヘグニ、我が主君の若きジグルトを打ち殺したその人でしょう？　あなたがフン族の国にいる限りは身を守ることです。あなたはここでは少なからぬ敵を持つことでしょう。私があなたに割り当てる宿泊場所としては、バカラール[10]の辺境伯ロディンゲイルのもとよりも良いところはありません。彼は素晴らしい領主です。」ヘグニは言った。「お前が我々に行くよう示してくれたのは、まさに我々が行き

---

[10] 現在のオーストリアのペヒラルンにあたる。山崎陽子：前掲論文(2001年)40頁参照。

たいと思っていた場所だ。馬で城に戻り、我らがそちらに向かうことを伝えてくれ。我々がかなりずぶ濡れになっていることも言ってくれ。」

13. ロディンゲイル、ニフルンゲン族を迎え入れる

彼らはそこで別れ、エッケヴァルトは馬を駆って帰った。ヘグニは戻って来てグンナルに、今あったことをすべて語り、全員を大至急起こして、城へと馬で向かわせた。エッケヴァルトはこのうえない速さで馬を飛ばしバカラールへと戻った。彼が広間に足を踏み入れると、辺境伯ロディンゲイルはちょうど食事を終えて床につこうとしていた。そこでエッケヴァルトは、自分がヘグニに会ったこと、グンナル王が大軍を率いて旅の途中であり、辺境伯のところで宿泊したいと言っていることを伝えた。辺境伯ロディンゲイルは立ち上がり、家来たちを呼び寄せて、彼らにすぐにこのうえない贅沢を尽くして彼の屋敷を飾らせた。彼自身は、大勢の騎士を連れて彼らを出迎えに行くために、愛馬に鞍を置かせた。彼の家臣たちは今や準備で大わらわだった。辺境伯が城から馬で出かける間に、彼の方に向かってグンナル王が彼の軍勢とともにやって来ていた。辺境伯ロディンゲイルはニフルンゲン族を親しく迎え入れ、彼らを自分の客となってくれるよう招待した。それをグンナル王は喜んで受け入れた。そしてヘグニは、エッケヴァルトは要求を叶えてくれたので、神の祝福があるようにと言った。

14. グリームヒルトの悲嘆についての噂

ニフルンゲン族は今や辺境伯ロディンゲイルの城砦の中庭にやって来て、ここで馬から降りた。ロディンゲイルの小姓たちは馬を引き受け、丁重にその世話をした。エッケヴァルトが言ったように、辺境伯は中庭で二箇所に火を起こさせたが、それは客人たちがずぶ濡れになっていたからである。一方の火のそばにはグンナル王、ヘグニ、兄弟たち、そして幾人かの他の騎士たちが座り、もう一方の火のそばには残りの従者たちが座った。しかし、先に座っていた者たちは辺境伯の後について広間の中へ行って、彼らには座席が割り当てられた。ニフルンゲン族は火のそばで彼らの衣服を脱いだ。そこで辺境伯の妻であり、グロンスポルト[11]で命を落とした大公ナウドゥンクの妹であるグーデリンダが

---

[11] モーゼル河畔にある町。山崎陽子：前掲論文(2001年)40頁参照。

言った。「ニフルンゲン族の方々は、たくさんのまばゆい鎧、少なからぬ堅固な兜、鋭い剣に新しい盾を持っておいでになったのですね。嘆かわしいことですが、グリームヒルトは今なお毎日彼女の前夫の若きジグルトを悼んで泣いています。」火が燃え尽きてしまうと、グンナル、ヘグニそして彼らの兄弟たちは広間へと行った。彼らはその夜はそこに座し、たいへんくつろいで飲み、非常に陽気な気分だった。それから彼らは床についた。

15. ロディンゲイルとグーデリンダの寝床での会話

辺境伯ロディンゲイルはベッドの中で妻の傍らに横たわり、彼らは語り合った。辺境伯は言った。「妻よ、私はグンナル王と彼の兄弟たちに何を贈ったらよいだろうか。彼らが名誉をもって受け取ることができて、そして贈り物として私にふさわしいものとは何だろうか？」彼女は答えた。「旦那様、あなたが考えるものは何でも、私にはすべての点でふさわしいと思います。」辺境伯は続けた。「若君ギーゼルヘルについて、私はお前に質問しよう。もしそなたが了承してくれるなら、私は彼に若い娘、つまり、私の娘を第一の贈り物として与えようと思うのだ。」グーデリンダは答えた。「彼が彼女に喜びをもたらしてくれるなら、彼に私たちの娘を与えるのは、よいことです。けれどもそのことについて私は気がかりです。」

16. ロディンゲイルの客人への贈り物

さて、明るい朝となった。辺境伯ロディンゲイルとその騎士たちは起きて衣服を着た。そこでニフルンゲン族も起きて、自分たちの衣服を求めた。辺境伯ロディンゲイルは彼らを誘ってもう二、三日自分のところに滞在して行くようにと言った。しかし、彼らは出発したいと言って、それ以上長く留まろうとしなかった。辺境伯ロディンゲイルはそれから、自分も騎士たちを連れて彼らに同行しようと言った。彼らはテーブルに着き、上質のワインを飲んで、たいへんよい気分だった。そこでいろいろな遊戯やそのほかの気晴らしの催し物が行われた。辺境伯ロディンゲイルは高価な宝石が取り付けられた、黄金飾りの兜を持って来させて、それをグンナルに贈った。グンナルはそのことで彼に非常に感謝した。その兜は彼にはたいへん高価なものであるように見えた。それか

ら辺境伯は新しい盾を手に取って、それをゲールノーツに贈った。彼の娘を彼はギーゼルヘルのところに連れて来て、言った。「立派なギーゼルヘル殿、もしあなたがご所望ならば、この娘を私はあなたの妻に差し上げたい。」ギーゼルヘルは、このような贈り物をいただけるとは祝福されているに違いない、彼女を感謝してもらい受けようと答えた。それから辺境伯ロディンゲイルは言った。「さあご覧下さい、若君ギーゼルヘル、この剣を私はあなたに贈りましょう。グラムという剣です。これは若きジグルトが所有していたものです。私が思うに、それはあなた方の軍勢の中でも最高の武器ですよ。」ギーゼルヘルはこの贈り物のことでもまた彼に感謝して、彼が自分にこの旅で示してくれたすべての名誉ある行いのために神の報いがあることを祈った。今や辺境伯はヘグニに話しかけた。「良き友ヘグニよ、どのような貴重なものを、あなたはこの私のところで手に入れたいと望むだろうか？」ヘグニは答えた。「ここに一つの盾が掛かっているように私には見えますが、それは紺色をしていますね。それは大きくて丈夫で、たくさんの傷があります。それを私は贈り物として頂戴したく思います。」辺境伯は答えた。「ぴったりの贈り物です。というのも、この盾を身に着けていたのは、あっぱれな男、大公ナウドゥンクだったのです。その盾は、ナウドゥンクが死ぬ前に、強者ヴィトガによってミームンク[12]の鋭い一撃を受けたのです。」妃グーデリンダはそれを聞くと、彼女の兄ナウドゥンクのことを思ってひどく泣いた。ヘグニは今やその盾を受け取った。ニフルンゲン族は辺境伯の贈り物と厚意に対して心から感謝した。彼らは満足すると、馬に鞍を置かせ、自分たちも仕度を調えて、辺境伯ロディンゲイルとそのきわめて勇敢な騎士たちに伴われて、城から馬に乗って出かけて行った。奥方グーデリンダは彼らに別れの言葉を述べ、彼らの道中に幸多かれと、彼らが名誉と名声をもって帰還できますようにと願った。辺境伯ロディンゲイルは、馬に乗って立ち去る前に、妻に口づけし、彼が帰還するまでの間、彼の国を十分に管理するよう彼女に言いつけた。

17. ズザートでの客人たちをもてなす準備

彼らの旅については、彼らが来る日も来る日も馬を駆けさせたということのほかには、今や何も語られるべきことはないだろう。彼らがズザートにやって

---

12) 強者ヴィトガが携えていた剣の名前。山崎陽子：前掲論文(2001年)40頁参照。

来たその日、湿っぽい天気で強い風が吹いていた。ニフルンゲン族と彼らの衣服はすべて今や濡れてしまっていた。彼らがトルタ[13]という名の町を通り過ぎていた時、彼らに向かって一人の男が馬を進めて来た。彼はアッティラ王の使者で、辺境伯ロディンゲイルを祝宴に招待するために、バカラールへと馬を走らせているところだった。しかし、その辺境伯は彼の家来たちを引き連れて一群の先頭に立って馬を進めているところであった。彼らが出会った時、辺境伯は「ズザートで何か新しいことがありましたか？」と尋ねた。使者は答えた。「最も新しいことと言えば、ニフルンゲン族がフン族の国にやって来たことです。アッティラ王は彼らのために饗宴の準備をしています。私はあなたをそれに招待するために、あなたのもとへ送り出されました。さあ、私はあなた方とともに引き返して行くとしましょう。というのも、私はこれで私の任務を果たしたのですから。」それで彼は向きを変えて、辺境伯ロディンゲイルとともに馬を進めた。辺境伯は使者に話しかけた。「どのように大きな祝宴をアッティラ王はなさろうとお考えだろうか？　どれだけ大勢そこに招待するおつもりだろうか？」使者は答えた。「すでにこのあなた方御一行の中には少なからぬ人数がおいでのように私には見えますが、アッティラ王は他にももっと大勢の人を宴に招待なさいました。さらに王妃グリームヒルトはその二倍も多く自分の友人たちを招き、そして国中から彼女に味方しようという家臣たちを集めています。宴の準備は、あたかも非常にたくさんの人々が来るかのように、そしてそのうえ長い時間かかるかのようになされています。」ニフルンゲン族がアッティラ王の門の前までやって来たことを伝えるために、ロディンゲイルは使者をズザートへ先に馬で向かわせた。使者はただちに王のもとへ馬を走らせ、ニフルンゲン族と辺境伯ロディンゲイルが町の手前までやって来たと、彼に報告した。アッティラは町中に布令を出し、どの家も飾り立て、いくつかの家は絨毯を敷くようにと言った。しかし、また別の家では人々は火を焚くように言われ、人々は今やズザートの町中で準備に追われた。ティードレク王に向かってアッティラ王は、頼みとして客人たちを出迎えに行ってくれまいかと言った。ティードレク王はそれを聞き入れ、彼の家来たちを連れて外に馬を乗り出した。彼がニフルンゲン族に出会うと、彼らはお互い親しく挨拶して、皆で一緒に町へと馬を進めた。

---

13) フン国の町。山崎陽子：前掲論文(2001年)40頁参照。

18. グリームヒルト、ニフルンゲン族に挨拶する

王妃グリームヒルトは塔の上に立って、彼女の兄弟たちがこちらにやって来て、ズザートの町に馬を乗り入れるのを見た。彼女は今やかなりの数の真新しい盾、きらめく鎧、そして優雅な騎士たちを目にした。そこで彼女は言った。「何と素晴らしいこと、この緑の夏の日よ！　今や私の兄弟たちはかなりの数の新しい盾ときらめく鎧を携えてやって来ました。今や思い出さずにはいられませんが、若きジグルトの大きな傷が何と深く私を悲しませることでしょう！」それから彼女は若きジグルトを思いひどく涙し、ニフルンゲン族を迎え、彼らに歓迎の挨拶をして、彼女のすぐ近くにいた者に口づけし、それから次々に他の人にも口づけした。町はほとんどすっかり人と馬とでいっぱいだった。ズザートには何百もの人と馬がいたため、その数がはっきり特定できないほどだった。

19. グリームヒルト、ヘグニにニフルンゲンの財宝を要求する

アッティラ王は義兄弟たちを親しげに迎え入れ、彼らに付き添って、見事に飾り付けられた広間へ行き、そして彼らのために火を起こさせた。ニフルンゲン族はさしあたり鎧を脱がず、武器を身から離さなかった。そこにグリームヒルトが広間に入って来たが、そこでは彼女の兄弟たちがすでに火の傍に座って身体を乾かしていた。彼らが外套を持ち上げた時、彼女はその下にきらめく鎧を見た。そこでヘグニは妹グリームヒルトを目に留め、ただちに兜を手に取り、それを頭に被って固く結んだ。フォルクヘルも同じことをした。グリームヒルトは言った。「ごきげんよう、ヘグニ！　今あなたは私に、かつて若きジグルトが所有していたニフルンゲンの財宝を持って来ましたか？」ヘグニは答えた。「わしがお前に持って来たのは悪魔と、それに加えてわしの盾と兜と剣だ。それにわしの鎧もわしは家に置いては来なかったぞ。」グンナル王が言った。「わが妹よ、こちらに来て、座り給え。」するとグリームヒルトは一番年若い弟ギーゼルヘルのところへ行き、彼に口づけして、彼とグンナルの間に座った。彼女はひどく涙を流した。そこでギーゼルヘルは彼女に尋ねた。「なぜ泣くのですか、王妃よ？」彼女は答えた。「それをあなたにお話ししましょう。今日も、またいつも私を嘆き悲しませるのは、若きジグルトが両肩の間に負った深い傷です。彼の盾にはいかなる武器も当たった形跡はないのです。」ハゲネはきっぱりと答

えた。「若きジグルトとその傷のことなどは放っておこうではないか。そんなことを我々は思い出したくはない。フン国のアッティラ王はお前にとって今、かつての若きジグルトと同じように、愛すべき人なのだ。彼はその倍も勢力がある。もうどうしようもないことだ。若きジグルトの傷はもはや癒すことはできないのだから。起こってしまったことは、そのままにしておくよりほかないのだ。」そこでグリームヒルトは立ち上がり、その場を去って行った。

それから間もなく、ベルン[14]のティードレクがやって来て、ニフルンゲン族にテーブルに着くように言った。アッティラの息子アルドリアーンが彼について来た。グンナル王はその少年を抱き上げ、彼を両手に抱えて出て行った。そしてティードレク王とヘグニはたいへん親しい友人だったので、お互いに腕を組み合わせた。そのようにして彼らは広間を出てからずっと進んで行き、国王の住居にやって来た。どの塔の上にも、どの広間にも、どの垣根のそばにもどの壁の上にも、貴婦人たちが立っていた。彼女らは皆ヘグニを見ようとしたが、それほど彼はあらゆる国々でその勇気と雄々しさのために有名だったのである。ニフルンゲン族は今や国王の広間に足を踏み入れた。

20. フン国での第一夜

アッティラ王は彼の玉座に座り、義兄であるグンナル王を自分の右側に座らせた。その隣には若きギーゼルヘルが座り、それからゲールノーツ、ヘグニそして彼らの盟友フォルクヘルの席が続いた。アッティラ王の左には、ベルンのティードレク王、辺境伯ロディンゲイルそして師匠ヒルディブラントが座った。これら全員がアッティラ王とともに玉座に座った。広間はまず最も高貴な領主たち、それから順々に他の人々で埋められた。そして彼らはその晩上等なワインを飲んだ。それは考えられる限りの最上級の素晴らしいもてなしによる見事な饗宴だった。すべての者が上機嫌だった。そのように多くの人々がそこに集まったため、ほとんど町中のどの家もいっぱいになった。この夜、彼らは心地よく安らぎ、客人としてもてなされて眠りについた。

21. ティードレク、ニフルンゲン族に警告する

朝になり人々が起き出すと、ティードレク王、師匠ヒルディブラントそして

---

14) イタリアのヴェローナを指す。

大勢の他の騎士たちがニフルンゲン族のところにやって来た。ティードレク王は寝心地はどうだったかと尋ねた。一行はたいへんよく眠れました、とヘグニは答えた。「しかしながら、私の気分はせいぜい中くらいといったところです。」ティードレク王は言った。「我が良き友ヘグニよ、もっと明るい気分で朗らかになって、我々を歓迎してくれ給え！　そしてここフン族の国では自らの身を守ることだ！　というのも、君の妹グリームヒルトは今なお毎日若きジグルトを偲んで涙しているのだから。君は帰国するまではそうする必要があろう。」そのようにティードレク王はニフルンゲン族に警告した最初の人であった。

22. ヘグニの容貌

彼らは支度を調えると、外に出て城の中庭へと歩いて行った。グンナル王の一方の側にはティードレク王が歩き、もう一方には師匠ヒルディブラントがついて歩いた。ヘグニの隣を歩いたのはフォルクヘルだった。すべてのニフルンゲン族はすでに起きていて、町の中を通って行き、娯楽を楽しんだ。今やアッティラ王も起き出して、バルコニー[15]に出て行って、ニフルンゲン族を観察した。幾人もの人々が彼と同じように外に出て来て、彼らの壮麗な行進を目にしようとした。しかし、すべての人々にとって最も重要だったのは、ヘグニの姿を求めることであって、それほど彼は有名だったのである。アッティラ王はヘグニとフォルクヘルが歩いているのを目にした。彼らはグンナル王にも劣らぬほど堂々たる身なりであった。またアッティラ王には、どこをヘグニが歩き、どこをフォルクヘルが歩いているのか、確信が持てなかった。というのも、彼らが深く顔の下の方まで兜を被っていたので、彼はそんなに正確に見ることができなかったのである。そしてあそこでグンナル王とティードレク王と一緒に歩いているのは誰かと尋ねた。大公ブロードリンは答えた。「ヘグニとフォルクヘルだと私は思います。」国王は答えた。「ヘグニのことなら私はよく知っている。彼は長い間私のところにいたのだ。王妃エルカと私が彼に刀礼を施し騎士としたのだ。当時、彼はまことに我々の良き友であった。」ヘグニとフォルクヘルは、お互いに腕を相手の首に回し合って、町の中を通って行った。彼らは幾人もの貴婦人たちを見て、彼らの兜を外し、自分たちの姿が見えるようにした。ヘグニはそのために簡単に見分けられるようになった。彼は胴体がすらりとし

---

15) 「上階の外に作られた天井のある通路」という原注がついている。

て、肩幅が広かった。彼は面長の、青ざめた顔をしており、ただ一つしか目がなかったが、その目は鋭い光を放っていた。それにも拘わらず、彼は堂々たる男だった。

ニフルンゲン族は彼らの家来たちとともに外まで歩いて行き、市壁の前までやって来て、町を見渡し、退屈しのぎをした。しかし、ベルンのティードレク王は自分の宿舎に帰った。アッティラ王はどんなに大勢の人々がそこに集まって来たのかを目にした。彼は彼ら全員を一つの広間に入れることができなかった。しかし、その日は良い天気で、素晴らしい夏の日差しが注いでいたので、彼は祝宴を果樹園で行うよう支度させた。

23. グリームヒルト、復讐をティードレク、ブロードリンおよびアッティラに乞う

その間に王妃グリームヒルトはベルンのティードレク王の館に、彼と内密な相談をするために行った。彼は親しく彼女に歓迎の言葉を述べ、彼女の要望を尋ねた。涙を流し嘆きつつ、彼女は言った。「良き友ティードレクよ、私がここに来たのは、あなたから良い助言をしてもらうためです。私があなたに今お願いしたいのは、善良な王よ、あなたが私に、若きジグルトが打ち殺されたという私の大きな苦痛の復讐をするのに支援して下さることです。私は今、ヘグニ、グンナルそして他の兄弟たちに復讐するつもりです。もしあなたがそうして下さるなら、王よ、私はあなた自身が仰るだけの金銀をあなたに差し上げます。また私も、もしあなたがジフカとエルマンリクに対して復讐をするために、ライン河を越えて馬を進めるおつもりならば、あなたに助力いたしましょう。」ティードレク王は答えた。「王妃よ、それは私には断固としてできません。それをする者は、私の助言や意志なくしてやらねばなりますまい。というのは、ニフルンゲン族は私の最高の友人たちなのですから。私は彼らにとって害となることよりもむしろ益となることをせねばならないのです。」そこで彼女は涙を流しながら出て行き、大公ブロードリンがいる館に向かった。再び彼女は言った。「ブロードリン殿、あなたは私が自分の苦悩の復讐をするのを助けて下さる気はありませんか？　ニフルンゲン族が若きジグルトに加えた仕打ちを思い出すと、私の心は煮えくりかえるのです。あなたが私に力を貸してくれる気があるのなら、私はそのことで今彼らに復讐したいのです。あなたがそうして下さったら、私はあなたに大きな領土や、あなたが要求するものは何でも差し上げま

しょう。」ブロードリンは答えた。「王妃よ、もし私がそんなことをしたなら、私は自分の身にアッティラ王の酷い敵意を招くことになりましょう。彼は彼らの良き友ですから。」そこで王妃は彼のところから去り、アッティラ王のところへ行って、言った。「アッティラ王よ、私の兄弟たちがあなたに持って来た金はどこですか、そして銀はどこですか？」アッティラ王が言うには、彼らは自分のところに金も銀も持って来てはいないが、しかし、自分は彼らを快く迎え入れようと思うということであった。なぜなら、彼らは自分を訪ねて来てくれたのだからというのである。王妃は言った。「もしあなたがそうしないというのなら、王よ、誰が私の恥辱の復讐をしてくれるのでしょうか？　ジグルトが殺されたことは、私の最大の苦悩です。私に厚意を示して、殿よ、私の仇を討って下さい！　そうすればあなたはニフルンゲンの財宝とニフルンゲン国全土を手に入れることになるのです。」国王は答えた。「妃よ、止しなさい、そしてもうそのことについては話さないでおくれ！　どうして私が義兄弟たちを欺くことができようか？　彼らは私を信用してやって来てくれたのだぞ。お前であれ、他の誰であれ、彼らに危害を加えることはならん。」グリームヒルトは立ち去り、ひどく不満気であった。

24. 果樹園での祝宴始まる

アッティラ王は外に出て、宴が開催される果樹園に行き、客人たちを呼び寄せた。すると全員が今やそこに流れ込んで来た。そこで王妃はニフルンゲン族に言った。「あなた方の武器を私に預からせて下さい！　ここでは誰も武器を携えるべきではありません。あなた方もご覧のように、フン族もそんなことはしていません。」ヘグニは答えた。「そなたは王妃であろう。どうしてそなたに男たちの武器を手に取ることができようか？　わしの若い頃にわしの父が教えてくれたのだ、わしは決して自分の武器を女に委ねてはならんとな。そしてわしがフン族の国にいる間は、決してわしは自分の武器を離しはしないぞ。」そう言ってヘグニは兜を被り、それをできる限りきっちりと結んだ。すべての者は、彼が激怒し不機嫌でいることには気づいたが、なぜなのかは分からなかった。ゲールノーツが答えた。「この旅に出て以来、ヘグニが機嫌よくしていることは全然なかった。ひょっとすると彼は今日、彼の知恵と雄々しさを見せつけるかもしれない。」彼はまた裏切りが起こることを予感し、ニフルンゲン族にとってこの旅がどのような結果になるのか、ヘグニがすでによく知っていることに勘

づいた。彼もまた兜を被り、固く結んで、完全に武装して庭園に行った。

アッティラ王もまた、ヘグニが怒りをあらわにし、兜をしっかり結んでいることに気づいた。彼はベルンのティードレクに尋ねた。「あそこで兜を被ってたいそう無愛想に振る舞っているのは何者だろうか？」ティードレク王は答えた。「私にはヘグニとその弟ゲールノーツであるかのように見えます。彼らはどちらもあっぱれな勇士で、異国の地でもそうなのです。彼らがこうするのも高き意志からなのです。まことに彼らは卓抜たる勇者です。予想できますが、あなたはそれに今日お気づきになるでしょう。もし私が推測したとおりになるとすればですが。」アッティラ王は立ち上がって、グンナル王とギーゼルヘルを出迎えに行き、グンナル王の右手、ギーゼルヘルの左手を取って、ヘグニとゲールノーツを呼んだ。それから彼は彼ら全員に、自分の右側の名誉ある席を、先程述べたように順々に割り当てた。庭には大きな火が焚かれた。火の周りを取り囲んでテーブルが据えられ、そこに座席も用意された。

ニフルンゲン族はすべて庭の中で兜と輝く鎧と鋭い剣を携えていた。しかし、彼らの盾と槍は預けることになり、その役を彼らは自分たちの小姓たちに割り当てた。そのうえ彼らは二十人の小姓たちを見張りのために門のそばに立たせて、もしも裏切りあるいは争いが起こったなら知らせるようにした。そうするようにヘグニとゲールノーツが忠告したのであった。フォルクヘルは王の息子アルドリアーンの養父の隣に座った。王妃グリームヒルトは自分の席をアッティラ王と向かい合う位置に置かせた。そしてそこに大公ブロードリンも座った。

25. グリームヒルト、イールンクを味方につける

ちょうどその時、グリームヒルトは騎士たちの指揮官である騎士イールンクのところに行き、彼に話しかけた。「良き友イールンクよ、あなたは私の恥辱の復讐をしてくれませんか？　アッティラ王やティードレク王そして私の友人たちは皆、私の仇を討とうとはしてくれないのです。」イールンクは答えた。「どうして復讐をさせようとしているのですか、王妃よ。なぜあなたはそうも激しく涙されるのですか？」王妃は答えた。「一番重く私の心にのしかかっているのは、若きジグルトが殺されたことです。もし誰かが私に助力してくれれば、彼の仇を私はこれから討とうと思うのです。」それから彼女は彼の黄金で飾られた盾を手に取り、言った。「良き友イールンクよ、私の恥辱の復讐をしてくれませんか？　私はあなたのためにこの盾を赤く輝く黄金で、そこに入る限りいっぱ

いに満たしてあげましょう。さらにそれに加えて、あなたは私との友誼も得ることになりましょう。」イールンクは言った。「王妃よ、それは大きな報酬ですが、しかし、それにもましてあなたの友誼を得ることの方がもっと価値があります。」彼はすばやく立ち上がり、武装し、彼の騎士たちを呼び寄せ、彼らにも武装するように命じた。彼は百人の騎士を従えていた。それから彼は彼の幟をまっすぐ立てさせ、そして王妃は彼に、まず小姓たちを打ち殺して、外にいるニフルンゲン族を誰も庭に入れさせず、中にいる者たちは一人として生かして外に出さぬようにと命じた。

26. アッティラの息子の死が戦闘を煽り立てる

王妃は今や急いで祝宴が催されている庭へ行き、自分の玉座に座った。その時彼女の息子アルドリアーンが彼女に向かって飛び出して来て、彼女に口づけした。王妃は言った。「我が愛する息子よ、お前が自分の血族たちと同じようになりたいと願い、十分な勇気を持っているなら、ヘグニのところに行きなさい。そして彼がテーブルの上に身を乗り出して料理を深皿から取ったら、お前の拳を上に伸ばし、彼の頬をできる限り強く打ちなさい。もしお前が思い切ってそれを行ったなら、お前は勇敢な少年ですよ。」少年はただちにヘグニの方へと走って行き、ヘグニがテーブルの上に乗り出すと、その子は拳で彼の頬を殴った。それはそのような小さな男の子から期待するはずのものよりも強い一撃であった。左手でヘグニは男の子の髪の毛をぎゅっと掴んで、言った。「このようなことをお前は自分から進んでやったのではないな。それにお前の父のアッティラ王に言われたのでもないだろう。そのようなことをお前に唆したのはお前の母親だな。お前はさしあたりこの一撃によって大した得もしないだろう。」そしてヘグニは右手で彼の剣の柄を握り、少年の頭を斬り落として、それをグリームヒルトの胸元へと投げつけて、言った。「上等なワインを我々はお前の庭で飲んだが、それには高い代償を支払わねばならない。こうなった第一の責任は我が妹グリームヒルトにあるのだ。」それから彼はフォルクヘルの頭越しに少年の養育係の頭も斬り落とした。「お前がこの少年の面倒をみたという功績は、こういう報いを受けるのだ。」そこでアッティラ王は飛び上がって、叫んだ。「立ち上がれ、汝らフン族よ、すべての我が家臣たちよ、武装してニフルンゲン族を打ち殺すのだ！」すると庭の中にいたすべての者たちが飛び上がった。ニフルンゲン族はさっと剣を抜いた。グリームヒルトの助言で、外では庭の門の前に新

鮮な雄牛の皮が広げてあった。今やニフルンゲン族が庭から走り出ようとすると、彼らは皮の上でつるりと滑った。その際にかなりの人数が死んだ。イールンクは外で彼の部下たちを連れて立っていて、何人ものあっぱれな者たちを打ち殺した。庭の中でもニフルンゲン族がかなりの人々を打ち殺した。死体は何百も庭の中で積まれた。

27. グリームヒルト、さらに復讐へと駆り立てる

ニフルンゲン族は、庭から外に出て行こうとした仲間を全員失ったことに気がつくとすぐに、引き返して、再び攻撃を行い、庭の中にいるフン族と戦った。彼らは攻撃をやめずに、フン族というフン族をすべて打ち殺してしまったので、彼らは逃げ延びることができなかった。

アッティラ王は砦の上に立ち、そこから彼の家来たちを駆り立てて、義兄弟であるニフルンゲン族に向けて突撃するよう命じた。しかし、ベルンのティードレク王は家来たちを連れて自分の宿舎に帰り、このように多くの良き友人たちが仲違いしてお互いに争っていることを、深く残念に思った。王妃グリームヒルトは一日中もっぱら、アッティラ王の所有物である鎧や兜、盾そして剣を取って、それを戦闘準備のできた家来たちに授けていた。時々、彼女は町の外にも出て、家来たちに攻撃するようけしかけ、金や銀や高価な装身具を彼女から受け取りたいと思う者は、ニフルンゲン族を攻撃して打ち殺すようにと叫んだ。彼女はそのことを一日中繰り返した。

28. 果樹園での戦い

そのようにして、この日、フン族が庭を襲撃し、ニフルンゲン族が抵抗したことでもって苛烈な戦いが始まった。(戦いが行われた庭園の名は、ホムガルテンという。今日でもそれはニフルンゲ・ホムガルテンと呼ばれている。)両陣営とも多くの者が命を落とした。しかし、命を失ったのはニフルンゲン族よりフン族の方が倍も多かった。それにも拘わらず、多くの家来たちが郡部や他の町から集まって流れ込んで来て、そのためフン族の戦力は初めより倍も多くなった。そこでヘグニは兄グンナルに話しかけた。「多くのフン族とエムルンゲン族が命を落としたように見えます。しかし、どれだけ多くのフン族の男どもを我々が打ち殺しても、依然として倍もの人数が平地から流れ込んで来ます。まるで我々が何もしなかったかのようです。フン族の貴族たちは我々の剣の前には現

れて来ません。我々はほとんどただ彼らの小姓を相手に戦っているに過ぎないのです。私が癪にさわるのは、我々がこの庭から外に出られないことです。外に出れば我々は自分たちで戦いたい者を選ぶことができるものを。このままの状況が続けば、この戦闘がどのように終わるのか、それははっきりと分かります。ニフルンゲン族は、フン族の剣よりもむしろ槍や矢玉に晒されていますが、いずれ倒れてしまいます。もし我々が刀剣類をフン族に対して用いることができなければ、我々は何ら名誉ある行為を行うことはできません。だから私が望むのは、」とヘグニは言った、「我々が雄々しくこの庭から逃げ出す道を探すことです。」

しかし、庭の周りには石の壁が張り巡らされていて、市壁のようにびくともしなかった。この石壁は今日もそこに立っている。ヘグニは従者たちとともに庭の西側へと走った。そこでは壁が一番砕けやすそうだった。ここでニフルンゲン族は壁を全力で倒壊させ、壁に大きな裂け目が入るまで頑張った。ヘグニはただちにそれを通り抜けて飛び出した。外にはその前に広い道と両側に建物があった。それはかなり狭かった。ゲールノーツとギーゼルヘルそして多くのニフルンゲン族が彼の後に続き、家々の間を突き進んだ。そこで彼らの前に大公ブロードリンが従者たちを連れて立ち塞がった。彼らの間に激しい戦いが始まった。

29. 庭の前での戦い

フン族は今や彼らの戦闘用の角笛を響き渡らせ、大声を上げて、ニフルンゲン族が庭から外に出たぞと叫んだ。すべてのフン族が今やこちらに押し寄せて来た。大公ブロードリンはすでにニフルンゲン族と戦っていた。そこにすべてのフン族がなだれこみ、そのためその近くのどの通りもフン族でいっぱいだった。ニフルンゲン族はその大勢の兵によって圧倒され、庭へと引き返した。しかし、ヘグニはある館へと飛び上がり、背中を閉ざされた館の扉に押しつけ、盾を自分の前にかざし、その手で一人また一人と打ち殺した。ある者は彼は手足を斬り落とし、またある者は頭を、そしてまたある者は身体を真っ二つに叩き切った。彼に攻撃した者は何者も、そのような目に遭うことを避けられなかった。そこは打ち殺された者たちがほとんど地面に倒れることもできないほどの人混みとなっていた。しかし、ヘグニは盾で自分の身を守っていたので無傷であった。

ニフルンゲン族の左側にはティードレク王の宿舎があり、彼自身が胸壁の上に完全武装して、彼の全軍とともに立っていた。ゲールノーツ、ギーゼルヘルそしてフォルクヘルは道を戻って来てその館の方に向かい、背中をそちらに向けて立って、きわめて激しい雄々しさをもって抵抗し、幾人もの男たちを打ち殺した。フン族は彼らを激しく攻めた。そこでゲールノーツはティードレク王に言った。「ティードレク殿、今やあなたはご自分の家来たちとともに出て来て、我らに助力すべきであって、多勢が無勢相手に戦うのを許すべきではありません。」ティードレク王は答えた。「良き友ゲールノーツよ、私はこの戦いが始まったことに対して非常に心を痛めている。ここで私は幾人もの良き友を失い、それに対して何もすることができない。私は自分の主人であるアッティラ王のフン族と戦いたくはない。しかし、現在の状態では、私はまたニフルンゲン族にも害となることは何もしないつもりだ。」

30. グンナル捕縛

グンナル王は、彼の兄弟であるヘグニ、ゲールノーツそしてギーゼルヘルが庭を突破したこと、しかしまた圧倒的な人数がヘグニに向かって突き進み、彼と戦ったこと、そしてすべての者が彼から逃れて庭へと逃げ帰って来たことを聞いた。グンナル王は東の門のそばに立って、イールンクと彼の家来たちがその前に立っている門を守っていた。今やグンナル王は、ヘグニが助けを必要としていることを聞くや否や、庭を突っ切って、ニフルンゲン族が壊した西の門へと急ぎ、果敢にも毅然として彼の家来たちとともに外に歩み出た。しかし、門のすぐ目の前には、鋭い武器を備えたフン族が立っていて、激しい戦いになった。グンナル王は凄まじい勢いで突進した。彼の家来たちの誰もそのように強くはなかったので、国王について行くことができなかった。そこで彼に、アッティラ王の甥、大公オージトが立ち向かって来たが、彼は力強い勇士であった。彼とグンナル王は、夜暗くなるまで、長い時間大いに敵意を見せて戦った。グンナル王が単独でフン族の大軍の中へと踏み込んだため、そして最強の勇士を敵としていたために、圧倒的な人数が彼を屈服させ、捕虜とし、武装を解くよう求め、彼を縛りつけた。フン族はこの勝利を獲得すると、大声で鬨(とき)の声を響かせた。そこでアッティラと王妃はグンナルを自分たちのところに連れて来るよう、そして彼を打ち殺さぬように命じた。オージトはグンナルをアッティラ王の膝のそばまで連れて来た。アッティラ王は彼を王妃の助言によっ

て、蛇の牢へと投じ込めさせた。そこで彼は命を失った。この塔はズザートの真ん中に建っている。

31. 市街での戦い

ヘグニとゲールノーツは、フン族がグンナル王を捕縛したと叫んでいるのを聞いた。そこでヘグニはひどく怒ったため、扉の前から走り去り、道を突進し、彼を取り囲む両側へと打ちかかった。何者も彼に抵抗できなかった。それをゲールノーツは見て、彼に向かって道へと飛び出し、フン族を右に左にと打ち殺した。その剣は地面に刺さってようやく止まった。若君ギーゼルヘルは果敢に彼に続き、剣グラムで幾人も打ち殺した。そのように猛烈に彼らが打ち込んできたため、彼らに対しては誰も持ちこたえることができず、フン族はすべて逃げ出した。しかし、かなりの人数が打ち殺された。ニフルンゲン族は今や庭から道路に出て来て、大きな鬨の声を上げて、フン族のことを、ニフルンゲン族が報復しようとしたとき逃げ出したので臆病な犬だと罵った。彼らは町中を走り抜け、男たちを見つけるとその場で打ち殺した。すでにすっかり暗い夜になっていた。フン族は依然としてあちこちから押し寄せ、いくつもの隊を組んで彼らと戦った。アッティラ王は自分の館に戻って、その背後の中庭を閉ざして守らせたため、ニフルンゲン族はそこではまったく歯が立たなかった。辺境伯ロディンゲイルは、ティードレク王の館へ行き、しばらくの間彼のもとにいた。大公ブロードリンとイールンクもまた彼らの家来たちとともに自分たちの宿舎に戻った。この夜の間になおも多くの男たちが町へとなだれこんで来た。完全に真っ暗であった。

32. ヘグニ、ニフルンゲン族を調べる

ヘグニは角笛を吹き鳴らさせ、ニフルンゲン族をすべて自分のところに呼び寄せた。彼は市壁のそばに立っていた。ニフルンゲン族は皆、今や彼のところにやって来た。そこで彼はゲールノーツに話しかけた。「どれだけの家来を我々はグンナル王とともに失ったのか？」ゲールノーツは、よくぞ言ってくれた、と答えた。「我々はこれから家来の数を調べてみましょう。ヘグニの右側にはギーゼルヘルが幟を持って立ち、私の家来たちは」とゲールノーツは言った、「ヘグニの右側に立って、私のそばには、まだ残っている幟に従って来た者たちが立つことにしよう。ギーゼルヘルの隣では、グンナル王の幟の後につき従って

来た軍勢が戦い、そして彼らのそばではフォルクヘルが戦うものとしよう。」ニフルンゲン族はそのように彼らの軍を配備した。それから彼らは、どれだけの人数を失ったのかを数えた。それは三百人にもなったが、しかし、まだ七百人が残っていた。ヘグニは、自分たちにはまだ堂々とした部隊がいるし、ニフルンゲン族が皆屈服するまでには、フン族はなおも多くの兵を失うことになるだろう、と言った。それに全員が同意した。ヘグニは言った。「今は夜だが、よく見えて戦うこともできる昼間だと、我々は勝利をものにすることができるだろう。というのも、アッティラ王には我らよりほんの少し多いだけの部隊しかいないのだから。しかし、我々が昼間になるまで待っていなければならないとすれば、各地方から部隊がこちらに押し寄せて来るだろう。そうすれば、我々はこちらの力量を上回るような軍勢を相手にしなければならないし、我々が命を失うまでに、英雄的行為を成し遂げられるのかどうかわしには分からない。大いに不愉快なのは、我々が火を手に入れることができないことだ。火があれば我々はもっと戦うところだが。」そのあとヘグニはわずかの戦友たちとともに急いで離れて行った。その近くには台所があった。そこで彼らは火を手に入れ、それをただちに家屋に投げて燃やした。そのため町中が明るくなった。

33. 大公ブロードリンの死

今やニフルンゲン族は自分たちの幟をまっすぐに立て、鬨の声と角笛の音のもとで町中を突っ切って行き、家々の前に来ると、フン族を挑発して攻撃させた。フン族は胸壁の上に高く立って、そこから下に向かって突進し、ニフルンゲン族は上へと駆け上がった。フン族は夜が明けるまでは戦う気はなかった。それにも拘わらず、ニフルンゲン族はこの夜のうちに相手の多くを打ち殺した。空が白みかけた頃、郡部から急ぎやって来たフン族が、町へと走って、その中に入って来た。彼らは強力な軍勢だった。

両軍は自分たちの幟をまっすぐに立て、自分たちの戦闘用のすべての角笛を吹き鳴らした。それから長い激しい戦いが始まった。フン族はたいへん雄々しく前方へと突き進んだ。ある者が別の者を鼓舞し、王妃グリームヒルトは一人一人に、ニフルンゲン族をできる限り多く打ち殺すように煽り立て、そのための報酬として金銀を提供した。この日、大公ブロードリンとイールンクが戦いの場に立った。アッティラ王自身はどこにも姿を見せなかった。ゲールノーツは彼の幟をブロードリンに向かって運ばせ、両者の軍勢は大いに激しく互いに

襲いかかった。ゲールノーツは家来たちの先頭に立って突進し、自分の周りの右へ左へと打ちかかり、何人もの男たちを打ち殺した。そこで大公ブロードリンが彼の前に立ちはだかり、彼らは強烈な打撃でもって一騎打ちの幕を開け、お互いに長い間、きわめて勇敢に攻め立てた。ゲールノーツはブロードリンの頭を斬り落とすことで、その戦いを終えた。そこでニフルンゲン族は、たいへん偉大なフン族の領主が命を落としたことに歓声を上げた。

辺境伯ロディンゲイルは、大公ブロードリンが殺されて倒れていると聞くと、非常に怒り、彼の家来たちに向かって大声で、自分たちは今や戦ってニフルンゲン族を打ち殺すべきであると叫んだ。彼は自分の幟を大胆に戦いの場へと運び込ませた。彼の前でニフルンゲン族は命を失った。今や彼は長い時間戦っていた。

34. イールンクの死

そこにヘグニが一人でフン族の軍勢の真っ只中に突っ込んで来て、片手で右側へ、また左側へ、そしてまた自分の前方へと、彼の剣が届く限りにフン族に打ちかかった。そして彼はまた大勢を槍でも刺し貫き、両腕を肩まですっかり血まみれにしており、またその鎧もすっかり血で赤くなっていた。たいへん長い間彼は戦い続け、かなり遠くまで敵軍の中へと突入していたため、彼はひどく疲れ果ててしまい、どうやって自分の家来たちのところに引き返したらいいのか分からなかった。彼はある館へと向かい、それを打ち壊して、中に踏み込み、扉の方へと振り返り、そこにもたれかかって休息した。

辺境伯ロディンゲイルはニフルンゲン族を激しく攻撃した。激しい戦いが起こり、フン族はヘグニが中にいる館へと押し寄せた。しかし、彼は扉を守り、大勢を打ち殺した。グリームヒルトはヘグニが立っているのを見て、大声でフン族を呼び、火をその館につけるように命じた。というのは、館の屋根は木材で組み立てられていたからである。人々はそのようにした。今やグリームヒルトは彼女の親愛なる友イールンクを呼んだ。「立派なイールンク殿」と彼女は言った、「今やあなたはヘグニに攻撃しなければなりません。彼はある館の中に隠れています。私に彼の首を持って来て下さい！　そうすれば私はあなたの盾を赤く輝く黄金で満たしてあげましょう。」

イールンクは、王妃が望んだとおり、ただちにその館へと向かった。館はそうこうするうちに煙でいっぱいになっていた。ヘグニはその中にいた。イール

ンクは果敢にもその館の中に飛び込んだ。中に入ると、彼は勇敢に剣でヘグニの太股へと打ちかかったため、それは鎧を切り裂き、脚から大きな肉の塊を切り落とした。それはちょうど調理鍋に合わせて切った肉の塊で一番大きいほどであった。それから彼はただちに館の外へと走り出た。グリームヒルトはヘグニが血を流しているのを見て、イールンクのところに行って、言った。「聞いて下さい、私の親愛なるイールンク、あらゆるあっぱれな勇士たちの中でも最高の人よ、あなたはヘグニに傷を負わせました。二度目にはあなたは彼を打ち殺すのです。」彼女は二つの黄金の輪を取って、一方を彼の兜の緒の右側に、もう一方を左側に繋いで、言った。「イールンク、立派なお方よ、私にヘグニの首を持って来て下さい。あなたはご自分の盾に入るだけたくさんの金銀と、その他のものも同じくらいたくさん受け取ることができます。」そこでイールンクは再び館の中のヘグニのところに走って行った。今回はヘグニは警戒しており、彼の方を向いて、槍を盾の下から彼の胸へと突き刺したため、槍は鎧と胴体を貫き通し、その穂先が両肩の間から再び現れた。そこでイールンクは石の壁[16]へと倒れ込んだ。それは「イールンクの道」と今日まで呼ばれている。ヘグニは言った。「わしはイールンクに傷を受けた仕返しをしてやったが、同じようにグリームヒルトにもその悪意の仕返しをするため、わしは剣を雄々しくフン族の国に鳴り響かせてやろう。」

35. ロディンゲイルの死とフォルクヘルの勇敢さ

今や大変な事態となった。辺境伯ロディンゲイルは激しく攻撃して、ニフルンゲン族を打ち殺した。若君ギーゼルヘルは彼に遭遇し、今や彼らはその武器を用いることになった。ギーゼルヘルの剣グラムはたいそう切れ味鋭かったので、彼が打ちかかると、それは盾や鎧や兜をまるで衣服のように切り裂いた。そしてそのため辺境伯ロディンゲイルはギーゼルヘルによって大きな傷を負って地面に倒れて死んだ。そのすべてを彼は、彼がかつてギーゼルヘルに友情の証として与えた贈り物である、まさにその剣によって被ることになったのである。

---

16) 原注がついており、それによると、「道」と「壁」にあたる語は古ノルト語ではほとんど同じであり、そこから「イールンクが壁へと倒れ込んだ」という誤解が生じたのだろうという。元来は石の道(ローマの道路)であり、その角石の上で勇士は息を引き取ったのだろうとしている。

ギーゼルヘルとゲールノーツはどちらも激しく攻撃し、アッティラ王の館までも突入し、そこで大勢を打ち殺した。フォルクヘルは、しかし、機敏にそして勇敢にヘグニがいる館へと突き進んだ。ひどく込み合って戦士たちが彼の前に倒れていたため、彼はどこにもむき出しの地面を踏むことができず、ただ死んだ者たちの胴体を踏むしかなかった。ヘグニは一人のニフルンゲン族の男が、彼を助けるために突き進んで来て、フン族を倒しているのを見た。彼は尋ねた。「そのようにあっぱれにわしのために力を尽くしてくれるのは何者だ？」フォルクヘルは答えた。「私はフォルクヘル、あなたの戦友です。さあ、私がここに打ち込んできた路地を見て下さい。」ヘグニは答えた。「お前がその剣をそのようにフン族の兜に鳴り響かせたことに対して、神の報いがあるように。」

36. フォルクヘルとゲールノーツの死

今やティードレク王は、辺境伯ロディンゲイルが死んでいるのを目にした。そこで彼は大声で叫んだ。「今私の最良の友、辺境伯ロディンゲイルが死んだ。もはや私は何もせずに座っていることはできない。皆の者、武装するのだ、我が家来たちよ！　私はこれからニフルンゲン族と戦わねばならない。」それからティードレク王は下の道路へと降りて行った。ドイツの歌謡に歌われていることによれば、ティードレクとニフルンゲン族が戦場で出会った時、臆病者にはすくみ上がるような思いがし、さらに町の中では、エッキザックス[17]がニフルンゲン族の兜にあたって鳴り響くのを、人々が耳にしたということである。ティードレク王は非常に激しく怒っていた。しかし、ニフルンゲン族は雄々しく抵抗した。この戦いでたくさんのエムルンゲン族が命を落としたが、また多くのニフルンゲン族も死んだ。ティードレク王は彼の一族を連れて非常に強烈に突進したので、立派な勇士であるトロヤのヘグニは鋭い剣を持って後ろに下がり、ゲールノーツとギーゼルヘルのところを目指して館の中へと入って行った。ティードレク王と師匠ヒルディブラントは彼らのあとを追った。今や館の中にいたのは、ヘグニ、ゲールノーツ、ギーゼルヘルそしてフォルクヘルのみであった。ティードレク王は勇敢に中へと突入した。扉の彼の前にはフォルクヘルが立ち、彼が扉から入るのを遮った。ティードレク王は剣で最初の一撃を彼の兜に与えたため、頭が刎ねられて飛んだ。そこでヘグニが彼の行く手を塞ぎ、

---

17) ティードレクの剣の名前。

彼らは一騎打ちを始めた。師匠ヒルディブラントはゲールノーツに攻撃を仕掛け、またそこでも激しい戦いが始まった。師匠ヒルディブラントは大きなラーグルフ[18]でゲールノーツに切りつけた。それによってゲールノーツは致命傷を負い、地面に倒れ込んで死んだ。今やこの館の中でまっすぐ立っている戦士は、この四人以外にはいなかった。つまり、一騎打ちをしているティードレクとヘグニ、そして別々の場所で戦っているヒルディブラントとギーゼルヘルのみであった。

37. ギーゼルヘルの死

今やアッティラ王が塔から降りて彼らの戦っている場所にやって来た。そこでヘグニは言った。「若君ギーゼルヘルに和平を与えれば、あっぱれな行為だと言えよう。彼はジグルトの死には罪がないのだから。わしが一人で彼に致命傷を与えたのだ。ギーゼルヘルにはその償いをさせないでもらいたい！　彼が生き長らえたら、彼はもっと素晴らしい騎士になることができよう。」ギーゼルヘルは言った。「こんなことを私が言うのは、私が自分の身を守る勇気がないからではありませんが、私の姉は、若きジグルトが打ち殺された時、私は五度目の冬を数える年で、まだ母のそばでベッドに寝ていたので、私はその暗殺には責任がないと証言してくれるでしょう。しかし、私はただ一人だけ兄弟たちよりも生き長らえる気などありません。」こうして彼は猛烈に師匠ヒルディブラントに襲いかかり、彼に一撃また一撃を見舞った。しかし、彼らの決闘は、予期されたように、師匠ヒルディブラントがギーゼルヘルに致命傷を与えたことで終わった。彼は命を落とした。

38. ヘグニの捕縛

そこでヘグニはティードレク王に言った。「かつてはあれほど確かなものであったにせよ、我らの友誼は破れたように見える。今わしは自分の命を力強く守るつもりなので、わしが命を失うか、あるいはお前の命をもらうかのどちらかだ。この決闘を雄々しく戦い抜こうぞ！　どちらも相手にその素性を非難することのないように。」ティードレク王は答えた。「私はこの決闘では誰にも援助を頼まない。まことに、私は機敏に雄々しく戦い抜くつもりだ。」彼らは長い間、

---

18) ヒルディブラントの剣の名前。原注がついていて、それによると、ヒルディブラントの剣が固有の名称で呼ばれている唯一の箇所だという。

激しく戦った。どちらが勝つのか、ほとんど予想できなかった。戦いはたいへん長く続いたので、彼らはどちらも疲れて傷ついていた。そこでティードレク王は激怒し、彼の意気はひどく高まった。なぜなら、そのように長い時間一人の相手と戦わねばならないということが、彼を苛立たせたからである。彼は言った。「まことに大きな恥辱だ、私がここに丸一日立って、目の前で私と戦っている相手が妖精の息子だとは。」ヘグニは答えた。「もっとひどいことはどちらから期待できると思うか、妖精の息子からか、それとも悪魔そのものからか？」今やティードレク王は怒りのためにたいへん荒々しくなったので、そのため火が彼の口から飛び出した。それによってヘグニの鎧はたいへん熱くなって、彼はそのために火傷を負った。それはもはや彼の身を守りはせず、彼の身を焼き焦がした。彼は言った。「今わしは和解に応じ、わしの武器を引き渡そう。わしはわし自身の鎖帷子(くさりかたびら)のせいで燃えている。わしは人間ではあるが、もしわしが魚なら、今にも焼かれて食べられるといったところだ。」そこでティードレクは彼を捕らえて、彼の鎧を引きはがした。

39. グリームヒルトの死

グリームヒルトは歩いて行って、焼け落ちた家から大きな燃えている火の塊を拾って来て、兄ゲールノーツのところに歩み寄り、彼が死んでいるか、あるいはまだ生きているのかを確認するために、彼の口の中に燃えている薪を突き入れた。しかし、ゲールノーツは本当に死んでいた。それから彼女はギーゼルヘルのところにも行って、彼の口にも燃えている火を突き入れた。彼はまだ死んではいなかったが、そのために彼は息絶えた。ティードレク王はグリームヒルトのしたことを見て、アッティラ王に言った。「見よ、どのように鬼女グリームヒルト、そなたの妃が、自分の兄弟たちであるあっぱれな者どもを苦しめ死なせたのか！　どれほど多くの男たちが彼女のためにその命を失ったことか！　どれほど多くの立派な勇士たちを彼女は根絶やしにしたことか、フン族、エムルンゲン族そしてニフルンゲン族を滅ぼしたのだ！　できることなら、彼女は同じようにそなたと私をも地獄へと追いやるつもりだ。」アッティラ王は言った。「彼女は本当に悪魔だ。そなたが彼女を打ち殺してくれ！　もしそなたが七日前にそうしていてくれたら、よかったことなのだが。そうすれば、今は死んでいる多くの高貴な勇士たちも健在であったろうに。」そこでティードレク王はグリームヒルトに飛びかかって、彼女を真っ二つに斬り捨てた。

40. ヘグニの死

それからティードレク王はヘグニのところに行って、快復する見込みはありそうかどうか尋ねた。ヘグニは、自分はあと二、三日は生きていられるだろうが、この傷できっと死ぬに違いないことは疑いがないと言った。ティードレク王は今やヘグニを彼の宿舎に連れ戻して、彼の傷の手当をさせた。ヘルラートという名のティードレク王の身内の女性に、彼はヘグニの傷に包帯を巻かせたのである。その晩ヘグニはティードレク王に、自分のところに女を一人寄こして、その夜彼女と一緒に眠れるようにしてもらいたい、と言った。ティードレク王もまたそのようにした。翌朝、ヘグニはこの女に言った。「しばらく経ったら、お前はわしの息子を授かることになるだろう。その男の子はアルドリアーンと名付けることだ。ここにある鍵束はお前が管理するように。それをその男の子に、彼が成長したら渡してくれ。これらの鍵は、ニフルンゲンの財宝がその中に隠されている、ジギスフリートの地下室を開くものなのだ。」そのあと彼は死んだ。

41. 結末

こうしてニフルンゲン族と、フン族の国の中で最も高貴な人々は、アッティラ王とティードレク王それに師匠ヒルディブラントを除いて全員その生涯を終えた。この戦いで千人のニフルンゲン族と四千人のフン族およびエムルンゲン族が命を落とした。ドイツの人々は、過去の歴史における戦いでこれ以上に有名なものはないと語っている。この戦いの後、フン族の国では名のある人物が不在の状態となったため、アッティラ王の時代には二度と、この戦いが起こる以前のような素晴らしい選り抜きの戦士たちはフン族の国に現れなかった。王妃エルカがかつてアッティラ王に、もし彼がニフルンゲン国の女性を妻に迎えれば、フン族全員に大きな不幸がそのために生じるだろうと予言していたが、そのことが今や現実のものとなったのであった。

42. ブルグント族滅亡の情報源

ここでお聞かせしたのは、この出来事がどのように展開したかをドイツの人々が語ったものであり、しかも部分的には、まさにこの出来事が起こったズザートで生まれ、長い間こうした戦闘が行われた舞台の変わらぬ様子を目にし

てきた人々によって語られたものである。たとえば、ヘグニが死んだ場所やイールンクが打ち殺された場所、あるいはグンナル王がその中で死んだ蛇の塔、そして今でもニフルンゲンガルテンと呼ばれている庭など。これらすべては今もニフルンゲン族が打ち殺された当時と寸分違わず残っており、また門もそのように残っている。つまり、古い門や、そのそばで戦闘が始まった東側の門や、ヘグニの門と呼ばれる、ニフルンゲン族が庭へと突き破って入った西側の門である。ヘグニの門は今日でも当時と同じように呼ばれている。しかし、ブレーメン[19]やミュンスターブルク[20]生まれの人々もまた、我々にこの出来事について語ってくれた。語り手の誰も他のことについてはより詳しいことを知らなかったが、それでもこの物語だけはすべての者が同じように物語ったのであり、この国で起こった重大な出来事について学識ある人々が詩作した、ドイツ語の古い歌謡が伝えていることとほとんど一致しているのである。

II.『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐の特質

以上のように『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐物語を邦訳により紹介してくると、第二次伝承におけるグリームヒルトの復讐は第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』のそれとはかなり異なっていることが明らかである。

まずグリームヒルトの再婚に関しても、『ヴォルスンガ・サガ』では母グリームヒルトの勧めによりグズルーン（『ティードレクス・サガ』のグリームヒルトにあたる）はいやいやフン族のアトリと再婚するのに対して、『ティードレクス・サガ』では『ニーベルンゲンの歌』と同じようにフン族のアッティラの求婚（使者オージト）を受けて、グリームヒルトは自らの意志でアッティラと再婚するのである。しかし、夫婦生活は『ヴォルスンガ・サガ』と同様に睦まじいものではなかった。

数年後ニフルンゲン族をフン国に招待する際にも、『ヴォルスンガ・サガ』ではアトリ王がシグルズ（ジグルト）の黄金に目をつけて、グンナル一族を招待するために使者ヴィンギを遣わすのであるが、『ティードレクス・サガ』ではグ

---

19) 北ドイツのハンザ都市ブレーメン。山崎陽子：前掲論文(2002年)42頁参照。
20) 同じく北ドイツのハンザ都市ミュンスターを指す。山崎陽子：前掲論文(2002年)42頁参照。

リームヒルトが先の夫ジグルトの黄金のことをアッティラにほのめかしながら使者を遣わせるのである。従って、のちにニフルンゲン族がフン族の国に到着した際、黄金を要求するのも前者ではアトリ王であり、後者ではグリームヒルトである。このように両者では役割が逆になっているのであり、後者の方が『ニーベルンゲンの歌』に近いことが明らかである。

『ティードレクス・サガ』が『ニーベルンゲンの歌』に近い内容になっていることは、ニフルンゲン族が招待に応じてフン国に旅立つ際に王妃オダが警告する場面からも明白である。すなわち、王妃オダは、フン国でたくさんの鳥が死ぬという悪夢を見て、旅立ちを止めるよう警告すると、ヘグニは一族が滅びることを予感しながらも、その悪夢による警告を無視して出かけて行くのである。またフン国へ向かう途中、ドナウ河を渡る際にヘグニが水の精に出会って不吉な予言を受けるエピソードのみならず、その先の国境で居眠りをしていたエッケヴァルトに出会って、彼の世話によって一行がバカラールの辺境伯ロディンゲイルのもとで休息し、さらにそこで辺境伯ロディンゲイルから各人に贈り物が与えられて、しかもヘグニにはナウドゥンクの盾が贈られ、ギーゼルヘルには辺境伯の娘が花嫁として与えられる点なども『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同様の展開である。さらになおニフルンゲン族がフン国に到着したとき、ティードレク王がグリームヒルトの企みをニフルンゲン族に警告するエピソードや、ヘグニがよく知られたその名前のためにフン族の注目の的となるエピソードなども同じである。そのあと果樹園で催される祝宴の場面では、アッティラ王とグリームヒルトの間に生まれた息子アルドリアーンがヘグニの頬を拳で殴る点では多少異なるものの、その打擲（ちょうちゃく）のために幼い王子がヘグニによって首を刎ねられて、それが両族間の戦いのきっかけとなることなども『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開である。

このように『ティードレクス・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』に近い比較的新しいニーベルンゲン伝説を含んでいることが容易に理解されよう。ここから両者は同類の素材を用いたであろうことが推定されるが、しかし、もちろん両者には相違点も多くある。フン族とニフルンゲン族との戦いとなってそれぞれの勇士が命を落す場面では、それぞれの勇士の戦う相手が『ニーベルンゲンの歌』とは異なっている。すなわち、ブロードリン（ブレーデル）はゲールノーツによって首を斬り落されることになっているが、『ニーベルンゲンの歌』ではダンクワルトによって殺されることになっている。イールンクに関しては、

両作品ともにヘグニによって二度にわたる戦いで命を奪われることになっているが、ロディンゲイルは『ニーベルンゲンの歌』においてのようにゲールノートと相打ちで倒れるのではなく、ギーゼルヘルによって殺される。また『ニーベルンゲンの歌』ではヒルデブラントによって倒されるフォルクヘル（フォルケール）は、『ティードレクス・サガ』ではティードレクによって首を刎ねられることになっている。さらにゲールノーツに関しても、『ニーベルンゲンの歌』のようにリュエデゲール（ロディンゲイル）と相打ちで倒れるのではなく、ヒルディブラントによって殺されることになっている。さらにギーゼルヘルもこのヒルディブラントによって致命傷を受けて命を落すのであり、ウォルフハルトと相打ちで倒れる『ニーベルンゲンの歌』とは異なっている。これらの相違点は『ニーベルンゲンの歌』の作者が新しい登場人物を取り入れて、両族間の戦いの場面を拡大して、より凄惨な戦いへと高めていることによるものである。戦う相手の組み合わせも変わってくるのも当然と言えよう。

しかし、最も著しい相違点は戦いにおけるグンナルとヘグニおよびグリームヒルトの取り扱いであろう。『ニーベルンゲンの歌』では最後まで生き残るグンナル（グンテル）は、『ティードレクス・サガ』では戦いの最初の方でオージトによって捕らえられて、蛇牢の中で死ぬことになっており、その点では第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』の影響が見られる。もう一人のヘグニに関しては、ティードレク（ディエトリーヒ）によって捕らえられてグリームヒルト（クリエムヒルト）の前に連れて行かれる点では、『ニーベルンゲンの歌』と同じであるが、しかし、『ティードレクス・サガ』ではそのあとティードレクがヘルラートという名の身内の女性にヘグニの傷の手当てをさせることになっていて、ヘグニはグリームヒルトによって殺害されることはない。ヘグニは戦いで受けた深傷のために、翌日、死ぬのである。ヘグニを自らの手で殺さない代わりにグリームヒルトは、倒れているゲールノーツとギーゼルヘルの口に燃えている薪を入れて、その生死を確かめることになっていて、その残虐さのゆえにティードレクによって成敗されるのである。武術の師匠ヒルデブラントによって成敗される『ニーベルンゲンの歌』とは異なった結末であるが、どちらかと言えば、『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの方がより粗野な面を残していると言えよう。

以上のように見てくると、フン族とニフルンゲン族の戦いで最後まで生き残った主な人物は、アッティラ王とティードレク王それに師匠ヒルディブラント

であり、この点でも『ティードレクス・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』にかなり近い存在であると言ってよいであろう。この作品では最後にブルグント族滅亡物語の情報源を挙げて明らかにしているように、北ドイツのハンザ都市ゾースト（ズザート）出身の人々や、同じくハンザ都市のブレーメンおよびミュンスター(ミュンスターブルク)の人々がハンザ商人として北欧へやって来て、ドイツの伝説・説話を語り聞かせたのであろう。それを聞いた北欧の物語詩人たちは、このブルグント族滅亡に関する説話を書き留め、十三世紀半ばに成立したのがこの『ティードレクス・サガ』である。第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』がより古い伝説相を伝えていて、北欧神話化の傾向が強かったのに対して、この第二次伝承の『ティードレクス・サガ』は低地ドイツ的性格の強い、比較的新しいニーベルンゲン伝説相を伝えるものであり、そこにこの作品の特質がある。さらにこの作品は五、六世紀以降のニーベルンゲン伝説の変遷を知るうえでもたいへん貴重な作品であり、そこに大きな意義があると言えるのである。

(2005・9・30)

＊本稿は石川栄作（徳島大学総合科学部教授）と野内清香（東北大学大学院文学研究科博士課程３年在学中）の共同研究による成果である。本稿の中心にある『ティードレクス・サガ』の邦訳については、まず野内が訳出して、石川がそれに加筆修正したものであることを付記しておく。